

課 題 水仙畑における赤葉防止に関する試験

担 当 者 中村 麻由美

目 的 水仙畑では、赤葉の発生により商品価値がなくなり、出荷量が減少している。赤葉は *Phoma* 菌が原因とされており、発芽時の傷より感染し、成長と共に赤葉になるとされている。
そこで、発芽開始 1 ヶ月間の農薬散布により赤葉の発生を防除できないか検討する。

供 試 品 種 越前水仙（ニホンスイセン）

試 験 圃 場 露地圃場（赤坂町）

試験区構成 1区 無処理
2区 トップジンM水和剤 10月12日
3区 トップジンM水和剤 10月12日、10月26日
4区 ユニフォーム粒剤 10月12日
※使用方法

	希釈倍率	使用量	使用方法
トップジンM水和剤	1500倍	100L/10a	散布
ユニフォーム粒剤	—	18kg/10a	土壌表面散布

トップジンM水和剤は、展着剤としてまくぴか 1ml/10L を添加

区制及び面積 1区制（1区辺り 0.25 m²（0.5m四方）、3カ所調査）

耕 種 概 要 栽培条件 露地
栽植密度 7,000～10,000 球/a
栽培管理 雑草の生育を抑えるため、6月16日及び9月8日に草刈を実施
農薬散布 試験区の通り
調 査 12月22日

結果及び考察

- 1 雑草の生育を抑えるため6月16日に除草を行った。また、芽が傷つかないように出芽前の9月8日に除草を行った。10月1日に地表面から約1~2cmの出芽を確認した。芽が5~10cmと生え揃った10月12日に農薬散布を行った。試験区3区は、トップジンM水和剤残留期間2週間により10月26日に2回目の散布を行った。
- 2 12月上旬に花芽(ヤリ)を確認し、12月22日の開花ピークに図1のように0.25 m² (0.5m 四方)の区画で3カ所ずつ調査を行った。
図2に示すような赤葉が、調査区画内の全株数に対して1つでもある株の割合を、赤葉株率とした。
- 3 赤葉に対する農薬効果を表1にした。1区無処理と比較すると、すべての薬剤散布の効果がみられた。各農薬区を比較すると、トップジンM水和剤2回が最も効赤葉株率が5.5%と低く、高くみられた。

以上の結果より、トップジンM水和剤2回が有効であった。他の試験区でも、無処理よりは効果がみられた。赤葉は、株に1つでることから、赤葉対策の薬剤散布の必要性が示された。

今後の試験では、より労力やコストが低い他の農薬の検討を行う。



図1 0.25 m² (0.5m四方の枠) による調査方法



図2 赤葉

表1 赤葉に対する農薬効果

試験区	種類	赤葉株率 (%)	標準偏差
1	無処理	19.1	3.23
2	トップジンM水和剤 1回	10.0	2.40
3	トップジンM水和剤 2回	5.5	0.41
4	ユニフォーム粒剤	11.6	3.42

